『教行信証』真門釈について

隅倉浩信

従来より『教行信証』の撰述の背景の対外的な要因として，南都北嶺の仏教界との対峙，法然門下における異義の続出，という二つの観点が指摘されており，そのことは「然末代道俗近世宗師沈自性唯心貶浄土真証　迷定散自心昏金剛真信」[1] と示されているが，真門釈においてもかかわりがあると思われる。

『教行信証』の撰述の背景には，迫害・異端が成立する必然性が見られる。

法然（1133-1212）は，保元・平治等の骨肉相喰む戦いの中，『往生要集』の指南に基づき，「偏依善導」の立場で，浄土宗の創唱を果たした。然しながら，浄土宗の独立による念仏一行の所立は，同時に聖道諸行所廃の主張をはらむものであり，当然そこには法然滅後三・四十年に及ぶ南都北嶺を中心とする一般仏教界からの熾烈な論難とそれに伴う迫害を受けることは容易に理解される。それに加え，開宗当時の法然教団は，入るものを拒まずの比較的自由な環境にあったといわれ，結果として，外からの迫害と内への雑多なるものの流入が，異義を続出せしめた。そういった外廓が『教行信証』の成立にはあった。

そうした異義をめぐる法然教団内外の状況は，親鸞においては，師法然を受ける教学的な課題として深化徹底せしめられていった。その一つの現れが，真門釈である。

真門釈は要門釈と隠顕釈を承けている。その三者の関係は，要門開設の「観経」と真門開設の「小経」は「大経」所説の弘願に帰一するということを隠顕釈により，前後に出す要真二門に対して，真仮の基盤を出したものである。隠顕釈は主に行の真仮を中心に述べられており，法然の廃立釈をうけて展開され，諸行廃捨の立場に対する貞慶・高弁等の聖道仏教からの論難に応じて，諸行方便の位置づけを試みたものである。つまり要門釈で，諸行の位置づけを聖道仏教の論難を契機として，隠顕の論理をもって明示し，さらに真門釈において，浄土門内での真仮を分別している。

真門釈が説かれる「方便化身土巻」は先行する五巻の真実に対して方便であるとともに，直接には「真仏土巻」の最後に真仮対弁して示されるように[2]，大悲

の願海に酬報した報仏・報土中の方便化土を明かすところのものである。

真門とは，二十願所誓の法門または『阿弥陀経』顕説の法門であり，二十願所誓の法門とは阿弥陀仏より与えられた他力真実の名号を自力の心で修する教えである。真門に隠顕を見るのは，「准知観経」といわれるように『観経』の隠顕にもとづくものであり，『小経』単独では，隠顕の義は導かれない。そのことは，

> ここをって『大経』には信楽といへり，如来の誓願，疑蓋雑はることなきがゆゑに信とのたまへるなり。『観経』には深心と説けり，諸機の浅信に対せるがゆゑに深とのたまへるなり。（中略）また一心について深あり浅あり。深とは利他真実の心これなり。浅とは定散自利の心これなり[3]。

と『大経』の「信楽」に『観経』の「深信」と『小経』の「一心」を対配し，「一心」の浅深を利他真実の心と定散自利の心としていることから窺える[4]。また

> しかるにいま『大本』によるに，真実・方便の願を超発す。また『観経』には，方便・真実の教を顕彰す。『小本』には，ただ真門を開きて方便の善なし[5]。

と示されていることからも窺える。ここでの真門とは第二十願の法門の意である。二十願に誓われた行それ自体は，あくまで真実行である大行である。それなら何故，二十願を方便の願といわれたのかというと，二十願の機が至心・回向・欲生の三心によって念仏を修する定・散の機であり，疑城胎宮に生まれる失をもつからである。二十願の念仏は，行そのものは真実であるが，それを修する機に自力の機執があるから，方便といわれたのである。要門釈において明かされた定散の機は，真門の機においてもその内実は通じるのであって，ここに『観経』に准じて隠顕が見られる所以がある。真門の中心的な関心も，「教頓機漸」であり，信の自力他力の分斉を明確にすることにある。「教頓機漸」とは

> それ濁世の道俗，すみやかに円修至徳の真門に入りて，難思往生を願うべし。真門の方便につきて善本あり徳本あり。また定専心あり，また散専心あり，また定散雑心あり。雑心といふは，大小・凡聖・一切善悪，おのおの助正間雑の心をもて名号を称念す。まことに教は頓にして根は漸機なり。行は専にして心は間雑す。かるがゆへに雑心というなり。定散の専心は，罪福を信ずる心をもて本願力を願求す。これを自力の専心と名づくるなり[6]。

と，示されるように，教そのものは頓教であるが，それを修する機は罪福信をもって本願力を願求する漸機という意である。二十願に誓われる名号は，善本とも徳本とも呼ばれ，万行を円備した一切の善法の本であり，一声称念するに至徳成満し衆禍みな転じる十方三世の徳号の本であるが，それを修する機に失があるゆ

えに，阿弥陀仏は果遂の誓いを起こして，十方濁世を勧化したのである。

その真門の機の内実は

まことに知んぬ，専修にしてしかも雑心なるものは大慶喜心を獲ず。かるがゆへに宗師は，「かの仏恩を念報することなし。業行をなすといへども心に軽慢を生ず。つねに名利と相応するがゆへに，人我みづから覆ふて同行・善知識に親近せざるがゆへに」[7]。

と，示されるように阿弥陀仏の恩を知らないばかりか，心に軽慢の心を生じて，自己の名利に心を奪われ，善知識にも親近しないといわれる。仏恩と善知識という契機は，真門釈に大きく二段ある中（前半は方便の行信・後半は弘願の実義を明かす），後半の部分で，『大経』『涅槃経』『華厳経』『般舟讃』『法事讃』の諸引文において示されるものである。まさに真門の法は「難中の難」であり，真の善知識に遇うことなくして，弘願の実義に入ることも難である。真門の機を親鸞聖人は「悲しきかな，垢障の凡愚」と「傷嗟」し「悲嘆」していられる。それは，「本願の嘉号をもておのれが善根とする」とするからである。

それとは全く対照的に，真門釈の最後には所謂「三願転入の文」[8]が示される。論主の解義と宗師の勧化により，要門を出で，真門に回入し，さらに真門を出て，選択の願海に転入したことを，「果遂の誓，まことに由あるかな」と讃歎し，阿弥陀仏の仏恩を深く仰いでいる。この文は親鸞聖人が，自己の入信の体験を振り返り，真門を出て選択の願海に転入しえたことは，二十願の働きによるものであるということを明かすことにより，阿弥陀仏の恩徳の深いことを讃歎させた文であると見るべきである。この文が，「信巻」にではなく，「化身土巻」にある意義は，如何に自力の執心が抜きがたいものであるか，そして，十八願の世界に転入するのは，あくまで仏の悲願によるということと思われる。

1）『浄土真宗聖典原典版』（以下『原典版』）二六一頁
2）『原典版』四七〇―四七一頁
3）『原典版』四九六頁
4）「親鸞聖人の方便観について―要真二門の釈意―」藤澤信照氏・『行信学報』第八号・平成七年五月
5）『原典版』四九四頁
6）『原典版』五〇三頁
7）『原典版』五二一頁
8）『原典版』五二一―五二二頁

〈キーワード〉 真門釈，教頓機漸，果遂の誓い

（龍谷大学大学院研究生）